

〈文献紹介〉

経済学者の追悼文集

杉 原 四 郎

はしがき

私は約20年まえからわが国の経済学者の追悼文集を蒐集してきた。単行本で出たものや雑誌の特輯号として出たもの、あるいは遺稿と追悼文をあわせたものなど、さまざまな体裁がある。明治にも福沢諭吉や田口卯吉のものなどが出ているが、私は拙著『思想家の書誌』（日外アソシエーツ、1990年）で約100点の追悼文集を紹介した。その後も蒐集を続け、関西大学の『経済論集』に紹介してきたが、本稿は、最近私の手元に集められた追悼文集から11点を紹介するものである。専門的な経済学者に限定せず、社会運動家や歴史家・評論家で経済学に関する業績の持主、あるいは哲学者であって社会科学経済学にもかかわりのある著書のある人などもとりあげている。近代日本の社会経済思想史をたどるうえに有益な情報源となると思い、経済資料協議会の会員の方々などの御支援を得て、この資料紹介をつづけてきたわけである。

I

ここでは19世紀の後半に生まれた6人の経済学者の追悼文集をとりあげる。そのうち山路愛山のみは在野の歴史家でありかつジャーナリスト、社会運動家でもあるという異色の存在である。

新渡戸稲造（1862—1933）

新渡戸には前田多門・高木八尺編『新渡戸博士追憶集』、故新渡戸博士記念事業実行委員会、1936年があるが未見。ここではつぎの三つの資料を紹介する。

矢作榮蔵会員の筆になると推測される英文追悼文が *Proceedings of the*

Imperial Academy, 9, 10, 1936に掲載、日本学士院『学問の山なみ』第一、1979年に所収。

鈴木英雄「新渡戸稲造博士と東大経済学部」、『経友』101号、1985年2月、新渡戸が明治14年札幌農学校を卒業し、開拓使庁につとめたが、同16年農政学を研究するために帝国大学文学部に入学した。だが大学の講義に失望し、翌17年アメリカにゆき、ジョンズ・ホプキンス大学に学び、更に札幌農学校からドイツ留学を命じられ、ボン、ベルリン、ハレの諸大学で学んだ後帰国、明治31年『農業本論』、『日本農業発達史』を発表する、36年彼は台湾総督府技師を兼任のまま京都帝大教授になり農業経済学を担当した。ところが新渡戸は39年、第一高等学校校長兼東京帝大農科大学教授となり、さらに42年東大法科大学に植民政策の講座ができると法科大学教授に就任し、植民政策や経済史を大正9年まで講義した（矢内原忠雄編『新渡戸博士植民政策講義及論文集』、岩波書店、1943年を参照）。

こうした新渡戸の経歴を『東大百年史』や『東大経済学部五十年史』などによって鈴木は書き、新渡戸から「植民政策」をひきついだ矢内原忠雄の諸著作や松隈俊子『新渡戸稲造』（みすず書房、1981年）を参考文献にあげている。

三番目は雑誌『新渡戸稲造研究』である。本誌は新渡戸の生誕130年を記念して新渡戸稲造会（盛岡市）が1992年9月に創刊したもの（現在は年に一回刊行）である。創刊号・第2号の目次（一部省略）はつぎの通り。

第1号

高橋富雄「『武士道』における『日本的』と『普遍的』」

切替辰哉「新渡戸稲造と内村鑑三と宮部金吾——そのアンビション・仁愛と道義——」

鳥居清治「新渡戸稲造と協同組合運動——洞察の明、先見性に学ぶ——」

佐藤みき子「偉大な国際人を育てた新渡戸勢喜——その生涯を顧みて——」

第2号（1993年9月、没後60年）

コプリー、佐藤全弘訳「有明月に古書を読む——ヴァンクーヴァーの

新渡戸記念庭園——」

米沢和一郎「新渡戸稲造と賀川豊彦——国際連盟と協同組合の精神——」

エルキントン、加藤武子訳「新渡戸稲造博士とメリー、P. E. ニトベ」(下)

(上)は第1号にのった。(下)は第3章ドイツ留学以降第五章学問の成果と実践まで。加藤武子は稲造の孫。

第二号には1992年9月東京でひらかれた生誕130年祭の記録がおさめられている。小島悦吉(北大)、川田侃(東大)、松隈俊子(東京女子大)のスピーチもふくまれている。また第2号の末尾に「資料」の欄があり、そこで、田辺定義は東京・多摩霊園に建った銅像についての経緯をのべ、また藤井隆至は新渡戸の柳田国男あて書簡2通を紹介している。

第3号(1994年9月)には、巻頭に新渡戸の「平民道(デモクラシー)」をおき、内川永一郎(岩手日報常務)「平民道に通ずる平民宰相——原敬と新渡戸稲造の大正時代」など11編の論文をおさめる。

『新渡戸稲造研究』については、杉原「経済思想家の研究雑誌」(関西大学『経済論集』第45巻第4号、1995年11月)を参照。

山路愛山(1864—1917)

大久保利謙編『山路愛山集』、明治文学全集35、筑摩書房、巻頭に遺影など写真6葉。

本書は大部分が愛山の著書と論説を収録したものだが、巻末に徳富蘇峰はじめ愛山の追悼文をあつめ、巻末に解題・年譜(著作目録をふくむ)・参考文献(大久保利謙)をつけているので、全体を広義の追悼文集としても読むことができよう。本集の月報には平林広人「愛山と信悞」、西田長寿「愛山・華山・蕨村」の2篇がふくまれている。

徳富の「愛山山路彌吉君」(『国民新聞』1917年3月20日、愛山は3月15日に没)は、「君が明治20年、静岡より始めて書翰を東京なる予に投じてより以来、……予の手を握りて、最後の息を引き取る際迄、予を以て共に議す可き一人となせり」といい、「其の死に瀕するや曰く、『此より明治天皇の御国に赴かむ』と。生時元気澁刺たる好男児は、其の死期に際して、一層見上げたる好男児として逝けり」とのべ

ている。

服部之總は「史家としての愛山」（『唯物論研究』、1935年6月）で、「蘇峰山人は日清戦争を轉機として『記者』的史家に転じ、愛山は日露戦争とともに国家社会主義史学を創出し、三叉（竹越与三郎）は大正期護憲運動の当時までブルジョア民主主義史学の正系をまもりとおした……それぞれの道をたどって『民友社時代』としての明治20年代をいま一度ふりかえれば、果敢な実践の10年代のとばりが夕闇となって拡がる大空を、「史学」としてのミネルバのふくろが、鷲のごとく雄大に舞うているのだ」と書いている。また愛山の三男平四郎は「父・山路愛山のこと」（『早稲田公論』1965年6月）の中で、12才で死別した父の思い出を語り、最後にこうのべている。

「せめては畢生の業とした『日本人民史』を完成させたかった。けれども、それにも増した喜びは、その死際の立派だったことだ。死の30分前、「^{このしやば}這娑婆はとても去られぬ世なれども生れぬさきの国に行かなん」の辞世を遺して世を去った。従容せまらずとは正にこのことだ。それは、わたくし等子供の心に深い感銘を与え、今なお昨日のように目に浮ふのである。」

私は本書におさめられている愛山の『現代金権史』（1908年）や大久保によるその解説や『豊太閤』（1908—9年）の岩波文庫版と朝尾直弘のその解説などをよみ、山路の諸著作はわが国の民間史学の伝統をきずいて現代の司馬遼太郎に及んでいる——朝尾は「『日本人民の中に潜める可能性』を問う所に本著『豊太閤』を著作した眞の動機があった」とのべている——と思った。別稿でとりあげた司馬遼太郎の追悼文集とともに本書を採録した所以である。

塩沢昌貞（1871—1945）

『早稲田大学史紀要』、第5号、1972年3月、「塩沢昌貞博士を偲んで——生誕百年記念祭講演録——」

塩沢昌貞名誉教授は、敗戦直前の1945年7月8日に病没したので、その追悼の行事は当時見送られて来た。やっと生誕百年にあたる1971年6月21—23日にその記念祭が早稲田大学で行われ、6月22日に小野記念講堂で講演会が開かれた。つぎの5人が壇上に立った。

開会の辞　小松芳喬

塩沢昌貞先生を偲んで 北沢新次郎

恩師塩沢昌貞先生 小汀利得

日本経済学史上の塩沢昌貞博士 本位田祥男

塩沢昌貞博士の経済学 高垣寅次郎

前掲の『紀要』には、5人の講演要旨を掲載している。小松・北沢両氏は早稲田大学教授、小汀利得氏は早稲田出身のジャーナリスト、他の2人は他大学の教授であり、塩沢と学問的交流のあった人である。ここでは本位田祥男（元東大教授・独協大学教授）と高垣寅次郎（元東京商大教授・成城学園名誉学園長）の講演を紹介する。

本位田は塩沢学説はドイツの新歴史学派を承継し、それを日本の実問題に適用したものであるとする久保田明光の所説を紹介し、この特色は塩沢をそだてた水戸の学風、大日本史を生み出したその学問的風土に根ざすものだという。そして塩沢がアメリカでイリーフ、ドイツでコンラッド、ワグナー・シュモラーに学んで歴史学派の研究を積んだとのべている。塩沢の業績では、大正11年に『国民経済雑誌』に発表された「経済と倫理との関係について」という論文や、日本社会政策学会での報告「工場法と労働問題」や、大日本文明協会から出版されたトートミアンツの『消費組合論』の塩沢の序文（本位田はこれが塩沢の手になるものと推定している）に注目している。また高垣寅次郎は塩沢が大正12年のスミス生誕200年記念講演会で行った「アダム・スミスの想源」と、塩沢述『経済学原論』（文真堂、1940年）という講義ノートに注目している。

『早稲田大学史紀要』には、塩沢についての文章が多く見られる。主なものをあげておこう。

久保田明光「恩師のノート——塩沢昌貞博士——」，第4巻，1971年3月。

藤原洋二「塩沢昌貞博士と金融論」，第20，21，23巻，1985—91年。

小松芳喬「追慕塩沢昌貞先生」，第21巻，1985年3月。

塩沢弘雄「父塩沢昌貞の学問と思想に対する評価に関する私見」，第22巻，1990年3月。

廣部周助（1875—1907）

廣部周助は東京帝国大学政治学科を明治33年7月に卒業，農商務省

で調査事務を担当、かたわら専修学校などの講師をしていたが、明治35年5月京都帝国大学法科大学助教授となった。明治38年8月欧米留学の途に上り、ドイツの諸大学に学ぶとともに、東欧も旅して統計調査に従事したが、不幸病を得て明治40年8月1日ミュンヘンで没した。

【京都法学会雑誌】第2巻第9号（明治40年11月）の雑録・会報欄に廣部に関する記事が二つのっている。一つは彼の葬儀が9月17日洛東智積院で行われ、井上學長と学生清瀬とが弔詞を読んだとある。もう一つは同僚友人の神戸正雄の「法学士廣部周助君小傳」で、故人が千葉県君津村の出身、千葉中学第一高等学校を経て東大に入ったこと、ドイツではミュンヘンでブレンターノとマイアの両教授に師事したこと、「経済学ハ其ノ専攻スル所ニシテ就中統計学、工業経済論ニ於テ造詣最深」いことなどを記している。

丸谷喜市（1887—1974）

【凌霜】，神戸大学凌霜会，第243号，1974年9月。

はじめに故人の門下生でその「経済原論」講義の後継者である林治一が「故丸谷喜市先生御葬儀」を書いている。1974年7月10日に86才で急逝した故人の葬儀が徳光院で同12日に行われたことや、7月8日阪急電車岡本駅で転倒・骨折して入院、肺炎で2日後に逝去したことをのべている。以下同窓生、同僚、門下生の弔辞や追悼文が12篇と略歴・主要著作リストがのっている。主著は『経済学原論』（1928年，42年改訂14版）で、歌集（『務古山麓より』，『星に泉に』）2冊がある。また遺影一葉と葬儀式場の写真一葉が掲載されている。

福田敬太郎は故人の神戸経済大学学長時代にその幕僚の1人だった時の思い出をのべている。1945年3月17日の空襲で罹災した同僚のための職員寮の開設を学長に相談して承諾を得、そこに10名前後の教職員が起居を共にした時、故人が「事細かにわれわれの日常生活の上に配慮されたことは忘れることができない」。

また家本秀太郎は、「丸谷先生の中には、一つは大きいスケールの人間性、二つは学究者としての丸谷博士、三つは歌人としての八十島元（以前は「緑雨」）の三つの人間像が……一個の丸谷喜市先生という全人格を形成していた」といい、故人が林治一助手のためにボエーム・バヴェルクの主著を「毎週一回講讀され、経済計画学へ逸脱のわ

たくしも参加を許された」ことをのべている。

故人は函館の出身で、一歳下の石川啄木とそこで友人となり、東京高商時代に東京朝日新聞につとめていた啄木とまた親しくなった。2人の学友関係は、「啄木と経済学者N」という朝日新聞1996年11月21日（「風景ゆめうつつ」18）にくわしい。丸谷には前掲の歌集の外没後に出た『茅渟の海』（1975年）もある。神戸大学退官後、甲南大学や大阪産業大学の教授としても活躍した。

本庄栄治郎（1888—1973）

『経済論叢』，京都大学経済学会，第112巻第6号，1973年12月。

巻頭に故人の遺影と略歴をかけた後、つぎに京都大学経済学会の「哀辞」をのせる。それには11月18日に永眠した故人（京大名誉教授）の京大における経歴、日本経済史学界における功績、1965年に文化功労者になったことなどをしてしている。

『社会経済史学』，第39巻第4号，1974年。

堀江保蔵「本庄栄治郎先生を憶う」

堀江は本庄の門下生で京大経済学部での経済史・日本経済史の後継者。恩師の学問的業績を語るとともに、「先生は教育行政的手腕の持主でもあった」として、とくに故人のすぐれた行政的手腕の産物として日本経済研究所の創立と運営をあげ、最後に故人が「研究文献を大事にすること」の例として文献目録の編集事業の発行すなわち『日本経済史第一——第六文献』や『経済史文献解題』の年々発行をあげ、「学界のこの『縁の下』の力持ち」的な仕事を、先生が世を去られた今後、どのようにするか、門下生たちに与えられた大きな課題である」とのべている。

この最後の『日本経済史文献』について藤井定義は、大阪府立大学附属図書館の『図書館だより』，第七号（1980年9月）に書いている。それによれば、『第六文献』のあとも『第七文献』が1977年に黒羽兵治郎によって編集公刊された。日本史・東洋史・西洋史をふくむ『経済史文献解題』（ともに大阪・清文堂）も引きつづき刊行されている。

本庄の功績としては、『経済史研究』（経済史研究会→日本経済史研究所，月刊）を1929年11月から1945年1月まで存続したこと（この雑誌については杉原『日本の経済雑誌』，日本経済評論社，91—94頁

参照)もつけ加えるべきであろう。

故人の年譜は、『本庄栄治郎著作集』第10冊(大阪・清文堂)1973年の巻末にあるものが最もくわしい。故人は京大を退官してから大阪商科大学、上智大学、大阪府立大学、龍谷大学につとめ、龍大を1969年にやめて長年の教壇生活を終えた。私は1939年京都経済学部に入學、先生の経済史や日本経済思想史の講義をきいたのだった。その頃先生は京大の図書館長の職にあった。私が日本経済思想史関係の論文抜刷をお送りしたら、御返事とともに『先学遺文』(自費出版物)を送っていただいた。

Ⅱ

ここでは19世紀末から今世紀初頭にかけて生まれた5人を取りあげる。島恭彦と広松満以外は大学人だが、他の3人は政治の世界にふかいかかわりを持ちながら、その生涯は経済学の動向にもつながるものであった。

三木 清(1897—1945)

三一書房編集部編『回想の三木清』, 1948年, B6版, 226頁, はしがき, あとがき等は全然ない。巻末に枘田啓三郎編の年譜及著作目録がある。

本文に13人の追悼文をおさめる。

波多野精一「三木清君について」は、三木清記念講演会で代読されたメッセージ、谷川徹三「哲学者としての三木清」も、その時の講演で、ともに京大の学生だった頃の三木から、卒業してやがて上京し、その後迂余曲折した人生をたどりながらも哲学の研究者として歩みつづけた三木の一生を語っている。

大内兵衛「三木清君の死に方」は、「哲学者三木君の死は日本における思想家一般の死に方として特殊であろうか。軍人東條の死でない方は日本武士の死に方として普遍的でないであろうか」とのべ、高倉テル「知識の良心」は、三木の遺児洋子にあてた手紙のかたちで、「昭和19年の私の事件のために、当局のやばんだんあつをうけ、ついにひさんな死をとげた三木清くん」が、どうして「私の事件」にまきこまれたかという直接の事情や、二人が京大で知り合ったそもそもの出会いの頃や、三木が外国から帰って東京でくらすようになりまた新

しく近づいたことなどを語っている。三木洋子「疎開していた頃」は、父と二人で埼玉の農家に疎開していた時の思い出をのべている。1944年3月12日、そこで高倉テルがたづねてきて、一泊して帰ったこと、そして「3月27日（岩波茂雄の貴族院議員選挙の日）に上京したきり父はもう帰って来なかった」と書いている。

豊島與志雄「三木清を憶ふ」、中島健蔵「三木さんの死」、清水幾太郎「三木清」、佐藤信衛「三木清氏の憶ひ出」、小林勇「孤独のひと」、中井正一「三木君と個性」、羽仁五郎「わが兄・わが師三木清」の文章は、中島の場合のように、三木の死の直後、1946年10月26日に書いたものもあれば、小林勇の場合のように、その一周忌に書かれたものもある（羽仁五郎のは1946年10月5日京大での追悼講演）が、友人や後輩として故人の追憶を語っている。清水幾太郎は、戦争が始まってわれわれは日に日に徴用され、「三木清はフィリッピン、中島健蔵はマライ、私はビルマと方面は違ったが南海を渡っていった。彼がフィリッピンで何をしたか。何を考えたか。彼は書かなかった。語らなかった。彼ばかりではない。吾々は一様に黙っていた」と書いている。私は三木がフィリッピンから帰って間もなく、京大で高山岩男の紹介で講演したのをきいたが、逞しく日焼けした風貌が印象にのこっているだけで何を語ったか全く覚えていない。羽仁五郎はハイデルベルクで三木清とはじめて会った時の思い出をかき、「三木さんはそのころから非常に思想的に大きな飛躍を始めたように思います」とのべている。

最後の文章は久野収の「足跡」で、これには「跋にかえて」という副題がついている。久野はそこで三木清が31才で書いた『唯物史観と現代の意識』（岩波書店、1928年）が当時の思想界に与えた大きな影響を力説してつぎのようにのべている。

「社会主義を出来るだけ経済学や政治学の領域に閉じこめることによって、社会主義との哲学的対決を回避し、そのことによって、時代の激流の中での態度決定を免れようとしていたアカデミイの哲学に対して、福本イズムは、ブルジョア哲学という、激しい攻撃をあげせながら、力強い挑戦状を投げかけたのである。アカデミイの専門哲学者たちは、あくまで無視と冷笑の態度で、福本イズムをあしらおうとした

が、青年学生の純真性は、当然かかる態度を不徹底なものと感じざるを得ない。今や従来の哲学と、この新しい世界観とが、いかなる関係を結ぶべきかを問い、それに大胆に答える仕事を果す人の出現が、ますます痛切に切望されるという段階に到達したのであった。その時三木さんが……社会主義が現代哲学の生産性と健康性を快復する重要な源泉である事情を説明した。その記録が『唯物史観と現代の意識』であった。哲学と社会主義とを、どう結合するかに、幼稚ながらも、真剣に悩んでいたわれわれ後輩の若い学生たちを、この書が、いかにゆり動かしたかは、恐らく他の時代からは想像のつかないほどであった」。

木村逸雄『碑の町散歩』，ヒガシマル醤油株式会社，72頁，1978年，龍野観光協会発売，200円。

龍野公園を中心に市内に点在する数十の文学碑・頌徳碑を地図入り，写真入りで解説したもの，50—51頁に，三木清（揖西町小神の三木清助の長男に生れ，龍野中学を卒業。一高，京大に進んだ）の，龍野公園白鷺山中腹にある彼のレリーフと歌碑が紹介されている。「しんじつの秋の日てればせんねんに心をこめて歩まざらめや」。阿部知二，東畑精一，谷川徹三，大内兵衛ら多くの友人の寄附金で，1964年11月3日に建てられた。

佐藤一郎・筆名寺島一夫（1905—1990）

『燭光——佐藤一郎遺稿集——』，編集・発行者佐藤義郎（清水市元神1-3-12）。1996年4月発行。A5版672頁，非売品。巻頭に遺影六葉。

「あとがき」によれば本書は遺族が父一郎（寺島一夫はその筆名）の遺稿をまとめ，私家版として発行したものである。第一—六章は遺稿であるが，序章の一．弔辞（波多野完治），二．発刊にさいして（佐藤義郎），三．寺島一夫とその時代（横本宏）との三つは，実質的には追悼文ともいえるもので，巻末におさめられた年譜，著作目録とあわせて，本書全体を追悼文集としてよむこともできよう。

波多野完治は東大文学部心理学科で共に学んだ交友60年にわたる親友で，1990年5月10日づけのこの弔辞で，「氏は大学卒業後公的には，寺島一夫として活動し，その名声は一世に高くなりました。……1935年の頃には寺島一夫も運動の中枢部に入っていたらしく，生活の大部

分は水面下にあって見えませんでした……一郎さんが捕われの身となったのは、昭和7年のことではなかったかと思います。結婚してから間もなくの佐藤一郎さんおよび奥さんには、大へんつらい期間であったことと思います。しかし御夫婦はその試練をたえぬきました」とのべている。

「発刊にさいして」を書いた長男の佐藤義郎は、本書の構成について説明している。1976年に71才を迎えた故人がかいた自伝「回顧と展望」を第一章に、三高時代に旧姓波多野一郎で発表された若き日の文芸作品を第二章に、戦後に静岡県社会問題研究所の機関誌に発表された文章四篇を第六章に、そして寺島一夫の名で主として『プロレタリア科学』に発表された論文についての解説は自分の友人横本宏（明海大学経済学部）に選定を依頼して、第三章哲学、第四章経済評論、第五章国際情勢の三章にそれぞれ数篇の関係論文を採録し、序章に横本の解説を収録したとのべている。そして、「父の著作で触れられていない私的な事柄と、環境や家庭についてなど、私の目にしてきた戦後の清水での父の姿」を書いている。強調されているのは、日中友好協会の仕事をはじめ、「いかに夫婦の間の協力関係がうまく機能していたか」ということである。「父の生涯にとっての最大の誤算は……母に先立たれた事ではなかったろうか」。

横本は晩年の佐藤一郎を訪ねた時のこと、その後たびたび書状をもらったことをのべ、その書状の一部を紹介し、晩年の佐藤の心境をつたえている。

佐藤一郎・寺島一夫の著作目録をみると、三木清や猪俣津南雄に対する批判の論文が目のとまるし、1965年に「『プロ科時代の回顧』——野呂栄太郎・大塚金之助のことなど——」（『経済』第14号）を書いていることがわかる。本書を三木・野呂・大塚の追悼文集などと読みくらべると、故人が講座渡として健筆をふるった1920年代の末から1930年代初頭にかけてのわが国の思想動向を理解する参考となるだろう。

島 恭彦（1910—1995）

『経済論叢』第157巻第3号、1996年3月。

巻頭に名誉教授島恭彦の遺影、略歴と、京都大学経済学会の哀辞をかかげ、巻末につぎの三つの追悼文をおさめる。

宮本憲一「島恭彦先生の業績を偲ぶ」（立命館大学教授）

広田司郎「弔辞」（関西大学教授）

横田茂「島ゼミナールの思い出」（関西大学教授）

三人の門下生のうち、宮本は故人の学問的業績を概観しているのに対し、広田と横田とは故人の人柄・人間性を語りつつ、研究者・教育者としての基本姿勢についてのべている。広田は、「微醺を帯びられて、八高時代のボート部の部歌やハイドンのセレナードなどを口ずさまれたお姿、幼少の頃のお嬢さんの手をひかれて農学部近くのグラウンドを散歩されたお姿は、今もはっきりと私の記憶の中にございます」と、横田茂は故人が演習教室でいつも「あらかじめ議論の枠を作るのはよくない。大切なのは現実がどのようなになっているのかということなのです」といっていたとのべている。

宮本憲一は、故人の財政学は、マルクス主義を中心とする政治経済学と、フランス啓蒙主義以来の西欧民主主義論という二つの、矛盾するかのように見える二つの理論が見事に総合されて、その土台となっており、マルクス・エンゲルス・レーニンからの引用にかためられた硬直的な理論でなく、フランスやイギリスの啓蒙思想や自由主義経済学を包含する独自の理論だという。この学風は、『近世租税思想史』（1938）と『東洋社会と西欧思想』（1941）の二著によって定礎されたとし、その特色を解説する。故人の最大の業績『財政学概論』（1963）については『島恭彦・著作集』（全6巻、有斐閣）第2巻の解説にゆずり、最後に『現代地方財政論』（1951）をとりあげて、つぎのように結んでいる。

「島教授はこの『現代地方財政論』の最終章において、民主的地方自治は制度ではなく、自由民権以来の民主主義運動にあることを明らかにされました。そして、すすんで自治労の自治研運動に参加され、さらにその先進者グループと一緒に、1963年自治体問題研究所を創立され……ました。……この研究所を中心とする地方自治運動への寄与が、戦後史にのこる社会的業績にあったといえるでしょう。」

島自身、『自叙伝 忘れえぬ日々』（自治体研究所、1986年）の第12章「民主的自治体をめざして」の中でこの研究所のことについて書いている。

なお、『経済』（月刊，新日本出版社，第4号，1996年1月号）に池上淳の，また『住民と自治』（自治体問題研究所，第392号，1995年12月）に小沢辰男ら6名の追悼文がのっている。

大平正芳（1910—1980）

『大平正芳——附追悼文——』，企画構成稲本博，財政と経済を語る会発行，1981年。大版413頁，3万円。巻頭に遺影10葉。

はしがき（無署名）で，「本稿は，大平首相の人となりから政治活動に至る公人，私人としての生涯を年代順に記述したものであるが，特に外務，大蔵大臣から総理大臣在職中の業績については，なるべく詳記することにした」とする通り，「大平の人となり」から「雨煙りの合同葬儀」までの26項目で故人の70年間の生涯をたどっている。巻末に国家予算の歩み，年表，大平語録，哀悼を捧げる人々，硯滴一遺稿，自民党役員一覧の六つが附録についている。その中の「哀悼を捧げる人々」には，12人の文章が収録されている。如水会相談役茂木啓三郎，如水会理事長川又克二，前一ツ橋大学長蓼沼謙一，一ツ橋大学名誉教授吉永栄助，相川泰吉（1936年東京商大卒の同期），渡辺美智雄（一ツ橋の同窓），嶋村久夫（如水会報編集委員）など一ツ橋の関係者が多い。嶋村は其中で故人が杉村広藏『経済倫理の構造』を火災の際失ったといったので送ったところ，「あたかも昔の恋人に出会ったような」気持ちができるという礼状がきたことをのべている。

「硯滴」の中におさめられている遺稿は，故人が高松高商・東京商大出身であったためにその同窓会誌『又信会会報』や『如水会会報』に寄稿したものばかりである。「山水を楽しむ」の中で学生時代愛読した大西猪之助『囚はれたる経済学』のことを書き，其中で「大西氏の愛弟子大泉行雄先生も必ずや何度も読まれたにちがいなだろう」とのべている。また「保守の哲学」の中で国立の母校の「図書館にあるわが国商業英語の鼻祖ブロックホイス先生の胸像の下に刻まれている」，「ゼミナールの恩師上田辰之助先生の碑文を確めにいった」ことを書いている。こうして大平は，大西，大泉，上田，杉村という福田徳三の学統につらなる学者の影響をつよくうけていることがわかる。

本書には，総理大臣としておこなった第87通常国会における施政方針演説（1979年1月）——そこで「文化の重視，人間性の回復，家庭

基盤の充実、田園都市構想」をのべて「公正で品格のある日本型福祉社会の建設」を強調している——が収録されている。又「年表」の中には、『財界つれづれ草』（1953年）、『素顔の代議士』（1956年）、『春風秋雨』（1966年）、『且暮芥考』（1970年）などの著書が出版されていることも指摘されている。

故人は城山三郎との対談の中で「一橋大と東大とのちがひ」について、母校という意識が一橋は東大とくらべて非常に強烈だと語り、「ぼくは、東大出ておったのでは、今日ないですよ。つまり一橋に助けられたわけです」とのべている（『如水会報』、1965年12月、本書22頁）。前述のような福田山脈との結びつきもあって、歴代の蔵相、総理大臣の中でエコノミストとしての風格が強く感じられるのも「一橋に助けられた」たまものかもしれない。

広松 渉（1934—1994）

広松については「続経済学者の追悼文集」（7）（関西大学『経済論集』45巻第1号）で、とりあげたが、ここでは他の2種の雑誌にのったものを紹介する。

『科学史・科学哲学』、東大科学史・科学哲学研究室、第12号、広松先生追悼、1995年。

「広松先生スピーチ」、1994年3月5日に開かれた広松の定年退官記念の科哲の同窓会での発言をビデオをもとに松本展明が原稿化したもの。「物的世界像から事的世界観へ」という持論が「大きな20世紀哲学の流れに棹さすものである」とのべている。

直村清隆「資料・駒場での広松渉先生の授業」は故人が1973年度から1993年度まで毎年学部・大学院でどんな講義・演習をどんなテキストを使ってしたかを「授業案内」や「科目紹介」をもとにまとめたものの。

村田純一「広松伝説」、広松の最後の2年間で授業した村田が、故人の身近にあって「少なくとも現代の哲学者の中でこれだけの『開かれた柔軟さ』を持った哲学者を見つけることは容易ではないであろう」ことを実感したとのべている。

佐々木力「類い稀なる哲学者逝く——広松渉名誉教授を偲ぶ——」、『教養学部報』、第386号、1994号、1994年7月6日。

佐々木はいう、広松は現代物理学に親しむにつれ、基本的にマッハの立場を支持するようになったが、と同時に、マルクス・エンゲルスの哲学的立場は、レーニンのそれと異なり、彼のライヴアルの立場とかなり近いものであることも確かめた。広松の原点は、正統的マルクス主義の教義への懐疑と反逆にあったと。

後記 資料蒐集上多くの方々に御世話になった。記して深謝する。
上宮正一郎，笠原昌一郎，桜田忠衛，佐藤義郎，深井人詩，藤井定義，
藤井隆至，長崎暢子。